OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	詩的原理としての言語内翻訳 : 高橋新吉論
Author(s)	松田, 正貴
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61408
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　松田　正貴　）	
論文題名	詩的原理としての言語内翻訳―高橋新吉論―

論文内容の要旨

詩の言葉は概して読みづらい。現代詩の場合、言葉の支配的な意味作用に抗うことをその主題とするものも多く、言葉で何かを表現するというよりも、言語の機能そのものを問題化する傾向が広く見られるといっても過言ではない。特に、言語の機能が「国家体制」の一部として取り込まれ、言葉の意味作用が「国家」によって管理されはじめた1930年代、詩人たちは、そのような力に抗うべく、さまざまなレトリックを駆使しながら、「言語に対する不信感」を表明するようになった。1937年9月、近衛文麿内閣の推進する「国民精神総動員」運動によって、同時代的言説の比重が「挙国一致、尽忠報国、堅忍持久」といったプロパガンダのほうに傾きはじめると、詩人たちは、特異な表現のあり方を模索する必要性をいっそう強く感じはじめるようになった。その点、「私は人の使う言葉でもって、こんな事を書いているが、言わば人の拵えた言葉だ。私がこんな事を書くのも私が書くのじゃなくて、誰かが私に書かせているのだとしか思えない。私一個の力でもってやる仕事じゃない」と書いた高橋新吉（1901～1987）は、同時代的な言説を敏感に察知しえた現代詩人の一人であったといえるだろう。本博士論文は、生涯にわたって「何もいうことはない」という構えを崩さなかった高橋のテクストに着目し、そのデビュー作から最晩年の作品までを、基本的には四つの時代――「ダダの時代」「狂気の時代」「戦争の時代」「禅の時代」――に区分した上で、そのような高橋の詩的構えが各時代の支配的な言説と関わりながら方向づけられていくプロセスの一端を解明するものである。

第1章「ダダ以前」では、一人の無名の詩人が「ダダ新吉」として名を馳せるようになるまでの過程に注目した。1920年8月1日付『萬朝報』に掲載された掌編小説「焔をかかぐ」によって文壇デビューを果たした高橋は、その公表のおよそ二週間後に同紙に掲載されたダダイズム関連の記事に触発され、自らダダの詩を書き、やがて「ダダの詩人」として名を馳せるようになった。第1章では、1920年夏の『萬朝報』に見られるデモ、テロ、ダダをめぐる言説を手がかりに、高橋が「ダダ新吉」として自らを主体的に打ちだすとともに、メディアの力によって主体化されていくその二重のプロセスを明らかにした。「焔をかかぐ」において「自然の静寂、無為、休止」といった境地に対する憧れを描いていたことからも明らかなように、この頃からすでに高橋は「言語に対する不信感」を抱きはじめていた。

第2章「ダダの時代――1920年代」では、このような「言語に対する不信感」を高橋がフィクションの形式で表現する際に用いたレトリックについて検証した。小説『ダダ』（1924）において高橋は、ダダの喧伝に明け暮れた1920年代前半の「狂躁状態」を一人称の語りで表出しようと試みるのだが、自らの狂気の度合いが増すにつれ、そのような語りに破綻が生じはじめ、次第に一人称の語りと三人称の語りとが混在しはじめる。この二つの人称のあいだを橋渡しするのが「第四人称」という超越的な語りの視点であった。「第四人称」という超越的な視点を設定することで、高橋は「言語に対する不信感」を乗り越えようとしたのである。ただ、この「第四人称」という概念は、新しい領域へのアクセスを可能にする創造的なものであると同時に、そうして開かれた領域を一望監視的な全体のうちに治めようとする欲望とも結びつく。超越的な視点が持つこのような両義性は、次の「狂気の時代」や「戦争の時代」における高橋のテクストのなかにも引きつづき見られるものであった。

第3章「狂気の時代――1930年代」では、精神錯乱に陥りやすい高橋の気質に引きつづき目を向けながら、小説『狂人』（1936）に見られる語りの仕掛けについて検証した。関東大震災のあと、当局による検閲が強化されるようになると、自らの発狂体験を語ろうとする高橋の文体にさまざまな「欠如」が生じはじめる。『狂人』では、検閲による文言の削除という外的な要因による「欠如」も、高橋の特異な文体と相互に作用する形で機能する。また『狂人』における「語り手」は、精神錯乱が激しくなると、「語り」を放棄してしまうのだが、そのような「語らない語り」は、その後も高橋の常套的なレトリックの一つとなっていく。

第4章「戦争の時代――1940年代前半」では、「皿の詩」の二つのバージョン（1920年初出時のものと1943年出版の詩集『大和島根』に再録されたもの）を検証することで、ダダや狂気の時代における高橋の言葉が、そのまま戦時下における「愛国詩」へときわめて自然な形で転じていく様子を明らかにし、詩的言語が非言語的な装置（情動、教育、マスメディア、特にラジオ放送など）と複合的に作用しながらプロパガンダ的な効力を発揮しはじめるプロセスを浮き彫りにした。これまで言語を即自的な実体として想定しながら、そこからの離脱を試みてきた高橋だが、言葉が言葉として機能する場合、そこには必ず言語とは別の力（他者に対する眼差しや情動、あるいは戦時下でいうならマスメディア、特にラジオ放送の伝達性など）が作用するのであり、そのような言表行為の集合的な組織力に対して高橋は、主体的にかかわる術を見いだすことができなかった。1942年「日本文学報国会」が創立され、詩部会の会長に高村光太郎、理事に佐藤春夫が選出されると、高橋もまた次第に「報国」の思いを自ら語るようになるのである。

このように「言語に対する不信感」を抱いていたにもかかわらず、戦時下において「国家語」に隷従せずにおれなかったという苦い思いを、高橋は戦後、しばらく払拭することができなかった。第5章「戦後――1940年代後半」では、戦後民主主義文学復興の風潮に対しては距離をおきながら、「言語に対する不信感」をいっそう強く抱くようになった高橋の詩的構えについて検証した。もちろん、敗戦直後の「荒地」において、「言語に対する不信感」を実存の問題として捉えようとする文学者たちは他にもいた。戦後の「荒地」において、「言語に対する不信感」と向き合わざるをえなかった詩人たち――鮎川信夫、田村隆一、黒田三郎を中心に――の言語観と照らし合わせる形で、戦後における高橋の詩的構えについて検証し、そこに「戦後責任」に対する高橋の立場を読み取った。

ダダをめぐる言説にせよ、狂気を一人称で語るという戦前の試みにせよ、戦時下における翼賛体制に迎合した「国家語」に対する全面的服従にせよ、高橋は同時代的な言説のなかから自らの主体性を打ちだすためのレトリックをつねに引きだそうとしていた。しかし、そのような「主体性」は「人の拵えた言葉」に依拠することでしか表出できないものであり、実際、高橋は生涯「誰かが私に書かせているのだとしか思えない」という意識から逃れることができなかった。ダダの時代からすでに「言語に対する不信感」をはっきりと表明していた高橋だが、戦時下における「国家語」の圧力に対しては抗いようがなかった。「わたしが語る」のではなく、「言語自体が語る」という状況の「危なさ」を、戦後、高橋が強く意識するようになったのは、戦時下における言語体験を実存の問題としてあらためて捉え直す必要があったからである。しかしこのような言語の問題を「言葉」でもって直線的に表現することは難しい。言語の意味作用に抗うためにはまず「書くこと」を放棄せねばならない。とはいうものの、言語のそのような側面を暴きだすためにはやはり書かねばならない。しかし、書かれたものはすべて「人の拵えた言葉」なのである。このようなパラドキシカルな状況を乗り越えるために、高橋が用いたレトリック、それが「言語内翻訳」であった。

高橋新吉が自らのテクストを通じて投げかけてくる問題、それは実にシンプルなものであった。つまり、言葉によって言葉を乗り越えることは可能なのか、言葉を用いることで「言語」の外に出ることは可能なのか、これである。このような観点から、本博士論文の終章「禅の時代――1950年代以後」では、「翻訳」という概念に着目しながら、高橋の詩的言語に見られる特異性を浮き彫りにした。「何もいうことはない」という高橋の詩的構えは、やがて禅の「不立文字」と接続され、そのような高橋の「語らない語り」が海外からも注目されるようになる。1950年代には、高橋の詩が「禅の詩」として英語に翻訳され、欧米でも紹介されるようになるのである。ルシアン・ストライクおよび池本喬による英訳がきっかけとなり、高橋は「禅詩人（ゼン・ポエト）」として位置づけられ、「国際的にも評価されている詩人」として、ふたたび衆目を集めるようになった。本博士論文の最終章では、ストライク、池本によって英語に翻訳された高橋の詩を「翻訳」という原理に照らし合わせながら読み解くことで、あらためてオリジナルの詩に見られるレトリック、つまり高橋の詩に見られる「言語内翻訳」の側面が浮き彫りになった。ストライク、池本は、オリジナルのテクストに見られる過剰な反復表現を自らの翻訳において大胆に切り捨てる。ただ、そのようなラディカルな翻訳をとおしてオリジナルを読みなおすことができたからこそ、かえって高橋の詩の特徴、つまり「過剰な反復表現」あるいは「言語内翻訳」の側面が確認できたといっても過言ではない。「書くこと」に抗いながら書き、自ら書いたものをつねに語り直しつづけるという絶え間ない「言語内翻訳」のプロセスをそのレトリックの一つと捉えるなら、高橋新吉の言葉を部分的に読み解くだけではなく、個々の作品を横断的に「読む」必要が生じてくる。本博士論文における各章の議論をとおして、そのような「読み」の可能性を、部分的にではあるが、明らかにすることができた。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　　名　（松田正貴　）		
	（職）	氏　　名
論文審査担当者	主 査　大阪大学　教授　出原隆俊 副 査　大阪大学准教授　斎藤理生 副 査　大阪大学　教授　岡島昭浩	

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　詩的原理としての言語内翻訳―高橋新吉論―

学位申請者　松田正貴

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　出原隆俊

副査　大阪大学教授　岡島昭浩

副査　大阪大学准教授　斎藤理生

【論文内容の要旨】

本論は、高橋新吉が生涯一貫して見せた「何もいうことはない」という詩的構えを通時的な軸として設定し、四つの時代――ダダの時代、狂気の時代、戦争の時代、禅の時代――において、高橋が同時代的な言説とどのように関わり、どのように自らを主体化したかのプロセスを、共時的な時空ブロックを用意しながら論じたものである。

「序章　言語に対する不信感」では、「何もいうことはない」というテーゼを一貫して保持していた作家の言葉を、個々の作品を横断的に「読む」ことによって改めて捉え直していく必要性を述べる。

「第一章　ダダ以前」では、『萬朝報』という一つのメディアにおける言説を手がかりに、高橋が文壇で名を馳せるようになるプロセスの一端を確認し、先行の潜在的テクストが、「高橋新吉」という仲介者を通して再構成され、表出してくるとする。

「第二章　ダダの時代――一九二〇年代」では、「発狂事件」の後、高橋は自らの体験をもとに書いた『ダダ』において、一人称の語りと三人称の語りとが錯綜する中で「第四人称」の語りという一つの概念に至るが、それもつねに差異化していくプロセスの途上にある一つの「点」として捉えるような読みが求められるとする。

「第三章　狂気の時代――一九三〇年代」では、『狂人』における語りは、同時代的言説からさまざまな手法を借用し狂気を一人称で語ろうとするが、どれほど言葉を尽くそうとも、鬼気迫る「狂気」の瞬間においては、そのテクストに空白が生じるとする。

「第四章　戦争の時代――一九四〇年代前半」では、二つの「皿の詩」を『歴程』における言説の流れと突き合わせながら検討し、日本における最初の「ダダ詩」とされるこの詩には、その後の現代詩の可能性を切り開く力が潜在的にあると同時に、超越的なものを後ろ盾とする全体主義的な志向性も、すでに秘められていたとする。

「第五章　戦後――一九四〇年代後半」では、一九四九年出版の『高橋新吉の詩集』は、「言葉」を主題とする数々の詩において、繰り返し「何もいうことはない」という思いを書き記すが、そこには「言語に対する不信感」だけでなく、戦時下における言語活動に対する「自己批判」も込められていたように思われるとする。

「終章　禅の時代――一九五〇年代以後」では、晩年の「禅詩人高橋新吉」という従来のイメージを脱神話化し、「禅詩人」という言葉の「胡散臭さ」の正体に迫ろうとする中で、ストライク・池本の翻訳によって高橋の詩における詩的原理が、表現したものをさらに別の言葉で言い換えるという言語内翻訳であることを確認するとする。

【論文審査の結果の要旨】

難解な高橋新吉の全小説・詩業を一貫した立場から検討しようとする壮大な試みであり、各論の結果としてその「詩的原理」を「言語内翻訳」として捉えようとする粘り強い姿勢は高く評価されてよい。それに関して翻訳詩に着目したことも有効である。また、この論文が、高橋の長期間にわたる創作活動の分析を通して、日本の２０世紀文学の一断面が浮かび上がってくる仕組みになっている点において、博士論文にふさわしい画期的で、一貫性と広がりを持った内容になっていると言える。高橋の体験や解説に従ってその詩を分析しようとするのではなく、また、新批評またはテクスト論的に作者を完全に切り離すわけでもない。揺れはあるものの、作者をひとつの機能のように捉えようとする態度も全体として首肯できるものである。

また、初出紙『萬朝報』の検討や、完璧とは言えないまでも『海事新聞』の調査をはじめとする様々な文献の博捜も貴重なものである。雑誌『変態心理の検討から中村古峡の『殻』との対比に気づいたことなども論を深めるのに寄与している。〈狂気〉にかかわる言説を正面から受け止めて、苦闘しつつも論者なりの方向付けを果たしていこうとする姿勢も好感が持てるものである。

さらに、「前衛詩と愛国詩とのあいだの「切断」を無化するような超越的な視点」から発表年次の離れた二つの『皿』を検討しようとする視点は本論文の中軸をなすものであり、確かにさらなる議論に値する観点であり、重要な問題提起と評価できよう。

一方で、深め切れていない論点も少ないとは言えない。何よりも二つの『皿』に関して、わずか一か所の改定が全体の枠組みを大きく変えているとすることについて、愛国詩集に収録されていること以外の根拠が弱いように思われる。それによって全体の読みがどうなるのかを提示すべきであったろう。

また、「言語内翻訳」ということについては、実質的な議論が終盤になされていることは論の構成上再検討されるべきであろう。さらに、ここでの「言語」の用語の使い方や、別の箇所での「国語」・「国家語」・「言語外」という表現も吟味不足であるように思われる。キーワードともいえる<超越的>という用語の使い方についても、その意味するものが文脈において、必ずしも一貫しているとは言えない。論証が弱く評論のように読める個所もあることも否定しきれないと言わざるを得ない。

さらに高橋の詩の独自性を際立たせるために、昭和初期の実験的な詩作と戦時下の時局への飲み込まれ方において、草野心平や宮澤賢治との具体的な比較があれば、論の厚みが増したであろう。<狂気>に関しても芥川以外の作品への目配りも必要であったと考えられる。

このように、改善すべき点も認められるが、大きな構えを持った論文として成果を上げていると判断できる。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。